

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：35402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K00475

研究課題名(和文) 地域を語り継ぐ自己メディア表現とコミュニケーションについての研究

研究課題名(英文) A Study of Self-Media Expression and Communication for Narratively Inheriting Local Culture

研究代表者

土屋 祐子 (Tsuchiya, Yuko)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：80458942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域を語り継ぐ主体を育むメディア表現の実践プログラムのデザインに取り組み、他者の語りから自己の語りを生み出すリレー型デジタルストーリーテリング・ワークショップを提案した。語り手たちは被災者や被爆者、高齢者ら<他者>と向き合い、共感のリンクを探る中で自らの想いや考えを掘り下げ、新たな物語を生み出した。作品の制作過程において他者の経験は自己の経験に転換され、発表することで自己の経験は他者の経験となっていく。我われは、物語作りを通じて、他者と地域への理解を深め、さらに他者との関係性を変容させつつ人と有機的に繋がっていくような継承のコミュニケーションモデルを考案した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we aimed to design a program for media expression practice for developing agents who inherit local culture. We proposed a Linking Digital Storytelling workshop that generates self-narratives evoked by others' narrative. Storytellers encountered others such as disaster victims, atomic bomb survivors, and elderly people. While finding "the empathetic links" to understanding others, they explored their own thoughts. In the process of creating a story, experiences of others are transformed into their own experiences. Furthermore, by presenting the created story to the public, their experiences become experiences of others. We developed an inheritance communication model by creating local narratives; this helps deepen the understanding of others and community and organically connects individuals while transforming their relationship with others.

研究分野：メディア論、メディアリテラシー、コミュニティメディア

キーワード：継承 デジタルストーリーテリング ワークショップ メディア表現実践 メディアリテラシー 地域メディア

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 住民主体の地域メディア論

デジタル技術が普及した 1990 年代後半から、東京中心のマスメディアシステムのオルタナティブとなるようなコミュニティ FM や CATV の番組、映画の制作、個人のブログなど、地域の住民主体のメディアづくりや情報発信が取り組まれてきた(津田・平塚編 2002、田村・白水編 2007、松本 2009)。しかしこれらの活動は受け手の限定や他者との繋がりの不足などの課題を残している(土屋 2009、Tsuchiya & Ogawa 2014)。住民主体の地域メディアは次の段階として、個人による地域の語りを共有、積み上げていくことが必要な段階にある。

### (2) コミュニティの再生と記憶の伝承

こうした「地域の語り」は、メディア研究だけでなく社会学や町づくり、災害研究など他領域でなされている議論と接続する。過疎化や高齢者の無縁化、災害と復興、活性化など様々な社会課題から人が支え合う地域コミュニティの再生が模索されている(吉原 2011)。そこでは他者理解に基づく様々な人びとの語りの共有が重要となっている。また、広島の語り部や東日本大震災のアーカイブの活用など、異世代を繋ぐ戦争や災害、地域文化の継承のあり方も検討されている(桜井・山田他編 2008、坂田 2014)。

### (3) 自己メディア表現の実践研究

本研究メンバーは地域メディアの変容についての調査・観察だけでなく、水越・吉見(2003)らに提唱されたメディア実践研究に取り組んできた。広義のアクションリサーチとして、ステレオタイプに陥らず、多様な人びとが自ら地域を語るためのメディア表現のあり方を探り、リテラシーを身につけていくためのワークショップをデザイン、実施してきた(小川・伊藤 2010、土屋 2010、坂田・小川他 2011、小川・伊藤他 2012、林田 2014、Ogawa & Tsuchiya 2014)。本研究ではこれまでの知見を基に、語りを生み出してだけでなく、語りを結び付けていくようなプログラムの考案に取り組んでいく。

## 2. 研究の目的

本研究は地域を発展的に語り継ぐための人びとのメディア表現とコミュニケーションのあり方を、調査と実践研究によって明らかにしようとするものである。個人メディアの普及などにより様々な立場の人びとが声を上げ社会的に発信する活動はもはや珍しいことではなくなったが、そうした多元的な声は埋もれてしまいがちである。本研究では、災害や過疎化など多くの問題に直面する地域において、その活性化やコミュニティ再生のために、多様な個人の語りを地域の語りとして共有し、積み上げていくことを目指す。また、そのための具体的な実践プログラムを

考案する。人と人のつながりの再構成や記憶の継承を、一人ひとりの自己表現を接合するメディアづくりを通して行っていく。具体的には(1)地域を語り継ぐためのメディア表現の考案、(2)地域を語り継ぐための実践プログラムの開発、(3)地域を語り継ぐためのコミュニケーションモデルの構築、の3点に取り組む。

## 3. 研究の方法

本研究では、地域を語り継ぐためのメディア表現とコミュニケーションのあり方を明らかにするために、調査、実践、モデルの抽出と3つのステップを設けた。の調査を踏まえ の実践プログラムを開発し、さらに のコミュニケーションモデルを抽出するというのが大きな流れではあったが、それぞれのステップでの知見を往復させ、追加の調査や実践に取り組みながらモデルを精錬させていった。主には平成 27 年度に、28 年度に、29 年度に に取り組むことを想定していたが、当初の計画より社会施設やグループと連携ができ、プログラム・デザインが順調に進んだため、実践には初年度より取り組むことになった。

は国内・海外のフィールド調査と、文献・資料の調査を行った。フィールド調査では、先行・関連事例について実際の活動を見学し、ヒアリングを行った。また、文献・資料調査では、テーマに関連した理論や実践について論じた書籍や論文を収集し、検討した。

については、調査の結果や先行実践に基づき、地域を語り継ぐメディア表現のためのワークショップ・プログラムを開発し、パイロット実践を行った。批判的メディア実践(水越 2011)のアプローチを用いて、取り組んだワークショップをふり返り、プログラムの有用性や改善点を洗い出し、修正したプログラムを再設計し実践することを繰り返した。

では調査とプログラム実践の結果から、地域を語り継ぐためのコミュニケーションのモデルを抽出した。

研究代表者・分担者は、地域間交流によるメディア実践プロジェクト「ローカルの不思議」(平成 23-25 年度基盤研究(C))「地域間コミュニケーションを通じたコミュニティの参加メンバーであり、これまで地域間交流によるメディア実践研究に共同で取り組んできた。そこで培われた共同研究の実践知やネットワークを活かして研究を進めた。また、研究メンバーは各地域でメディア表現に関する実践的プロジェクトを展開しており、それらの知見をワークショップ開発や実践に応用した。

## 4. 研究成果

(1) 平成 27 年度：継承される若者への着目  
研究対象の焦点化  
国内外の調査を進める中で明らかになっ

たことに、まず住民主体の表現活動の広がりがあげられる。例えば、日雇い労働者ら住民のアート活動を支援する釜ヶ崎芸術大学では、習字や詩、俳句など様々な表現や語りの活動を通じて地域の人びとの暮らしの中の言葉を引き出し、商店街のコミュニティスペースなどで共有している。釜ヶ崎の取り組みは、多様な人びとが日々を生きることに活力を持ち能動的になる上で、表現と学びの可能性を再認識させる。一方で、地域を語り継ぐ研究や活動は、何をどう残すのかといった継承する側の試みについては、アーカイブ構築や語り部の育成、継承施設の建設など多くの積み上げがあるものの、誰がどのように引き継ぐのかという継承される側に目を向けたものは少ない状況がある。本研究では、そうした受け継ぐ者、特にこれからの社会の担い手となっていく若者たちに焦点をあてることにした。彼・彼女らが継承の主体となり、能動的に語り継ぐことがいかに可能かに研究の焦点を絞り、表現や学びに着目しながら取り組むこととした。

能動的な継承活動の先行事例としては、災害に関しては、防災科学技術研究所によるラジオドラマとマップ制作や、京都大学防災研究所のゲーム教材「クロスロード」の取り組みについて調べた。また、歴史的継承については、取材した被爆者のストーリーを子ども自身が演じる演劇「ヒロシマの孫たち」や、被爆者証言をデジタルマップ上に記録する「ヒロシマ・アーカイブス」の試みについて検討した。米国の美術館の体験展示、ウォーキングツアーも参考にした。いずれも制作やゲーム、体験という参加型プログラムで、継承者たちが主体的に学べるしかけがデザインされた取り組みであった。また、独自の文化が根付く奄美大島でコミュニティ FM や新聞社の聞き取り調査を実施し、継承の広がりと継続のためには、地域メディアの役割が重要であることについて考察を深めた。

実践については、調査から得た知見を踏まえつつ、デジタルストーリーテリングなど研究メンバーたちがこれまで取り組んできたワークショップを基に開発したプロトタイプ実践に取り組んだ。研究代表者は地元出身者の想い出を聞きながら地域を歩き、ストーリーを立ち上げる「コミュニティ・メモリー・リンク」実践に取り組んできており、それを基に「リレー型デジタルストーリーテリング」ワークショップを語り継ぎの観点から再設計した。他者へのインタビューから、共感できるエピソードや言葉を選び、その応答として自己の語りを紡ぐプログラムを考案し、3回実施した。2回は前年度に七十数名の犠牲者を出した広島市の土砂災害の経験や記憶の語り継ぎをテーマとして、広島経済大学の学生による実践を試みた。具体的には被災や復興に関わる当事者をインタビュー撮影し、その中で最も大事だと考えた箇所の映像を切り出し、その語りに対し、自分たち

が考えたことを写真と自分のナレーションで表し、編集して2~3分の動画にまとめた。もう1回は宮城県東日本大震災アーカイブス連絡会議と連携し、女川町で Bridge! Media 311 取材ワークショップを開催した。非被災地に住む新潟・龍谷・広島経済の大学生と名古屋大学院生が参加して、被災地で復興に取り組む人びとに話を聞き、気づきや想いをデジタルストーリーにまとめた。これらの実践を通じて、「他者への応答としての自己語り」という能動的な語り継ぎのためのメディア表現様式と実践プログラムのプロトタイプを考案することができた。

また、対話・協働型デジタルストーリーテリングとして取り組んできた「メディア・コンテ」ワークショップを地域の記憶の継承を目的としてアレンジし、名古屋大学院生が参加して戦争の記憶をテーマに「ピースあいち」で実践した。その他、感性に基づく気づきと表現の広がりを検討するために、地域の音に着目し、福岡で広島経済大学生による「音ハガキ」ワークショップを実施した。

これらの実践は、ローカル新聞や放送番組などに取り上げられ、参加学生たちはコミュニティ FM ラジオで実践報告を行った。また、国際学会のワークショップや国内の公開研究会で報告しアウトリーチに取り組んだ。

(2) 平成 28 年度：聞く受動的経験から語る能動的経験へ ワークショップ・プログラムの開発と実践

前年度得られた知見から設計コンセプトをまとめ、ワークショップ・プログラムの開発と実践に取り組んだ。継承活動は、被災者と非被災者、当時者と非当事者、年配者と若者、住民と訪問者など、異なる立場の人びとが出会う接点であり、他者間のコミュニケーションとして捉えられる。つまり、能動的な語り継ぎは、「継承される(伝えられる)者」による「継承する(伝える)者=他者」への理解によってなされるものと整理できる。このコンセプトのもと、昨年考案したリレー型デジタルストーリーテリングを発展させていった。

第1に、前年度のリレー型デジタルストーリーテリングをひな型として、地域文化をテーマとした実践をデザインし、鹿児島県立大島北高校の聞き書きサークルと連携して行った。聞き書きサークルでは、地元のお年寄りに奄美大島の風習や芸能、過去の暮らしについて話を聞き、冊子にまとめる活動に取り組んでおり、本実践では、聞き書き調査の中での高校生の気づきを、自分のナレーションと写真で表す制作を行った。高校生たちは地域のイベントやコミュニティラジオ放送局の番組で自分たちが作った作品について報告した。

第2に、前年度の音の実践とリレー型デジタルストーリーテリングを組み合わせ、音に喚起される記憶からストーリーを立ち上げ

る新たなプログラムを考案した。福岡女学院大学と広島経済大学の学生が参加し、大学生たちは福岡と広島という異なる地域の間でそれぞれが拾い上げた「なつかしい音」を交換する中から、日々の暮らしに潜む記憶を掘り起こし、自らの経験や成長、家族の愛情などを繰り返るデジタルストーリー動画を制作した。制作プロセスを通じて、自分のこれまでの歩みを相対化・可視化し、完成後は両大学生が集まって作品の合評会を行い、一人ひとりの気づきや想いを共有した。

第3は、これまで取り組んできた実践の継続である。前年度に引き続き、土砂災害の記憶の継承のためのリレー型デジタルストーリーテリングを、復興交流館「モンドラゴン」の協力のもと、広島経済大学の学生たちが実施した。

いずれのリレー型デジタルストーリーテリングに参加した学生たちも、作品作りを通じて、他者理解を深めた。また、同時に、他者の語りにも喚起され、自らの想いや考えを掘り下げ、言葉やイメージで表すことで自己理解も進んだ。他者への応答として自己を語る本プログラムは、他者の話を聞くという受動的経験を、他者から話を聞いたことを考え、自己の語りを生み出す能動的経験へと転換させる機能を果たした。実際、参加者たちからは災害や伝統など当初他人事であった継承のテーマについて自分の問題として捉える認識の変容が観察できた。地域を語り継ぐ主体を育んでいくメディア表現実践のプログラム・モデルを考案できたと言えよう。また、本プログラムはエリクソンの「世代継承性」を涵養するものとしての理論的発展性が考えられる。さらに、他者の語りから自己の語りを生み出す際、他者の考えや経験、想いを「わかる」瞬間が訪れるが、そこでは他者の話や経験に対する共感と自分なりの意味づけや解釈がなされている。「わかること」の結びつきによって、他者とながっていくコミュニケーションモデルとしての意義も見いだせた。

プログラムの開発内容や実践結果の報告は、国際学会や国内学会、公開研究会で行った。また、研究関連の研究会を開催し、論文や図書でも研究成果の公表を進めた。

(3) 平成 29 年度：共感のリンクによる語りのリレー 他者と地域理解のコミュニケーションモデルの構築

最終年度は、昨年度までのリレー型デジタルストーリーテリングを応用していく表現実践に取り組んだ。また、総括のための研究フォーラムを開催し、コミュニケーションモデルの構築を試みた。

取り組んだ実践はリレー型デジタルストーリーテリングの3つの応用プログラム・モデルとして整理することができる。1つ目は対話に基づく「協働他者語り」モデルである。広島と名古屋の学生が協働制作者となって、

原爆小頭症の女性の半生を振り返り、彼女の経験や想いを伝えるデジタルストーリーテリング作品を制作した。2つ目は「サウンドストーリーテリング」モデルである。昨年度の「なつかしい音」から喚起されるストーリー作りを応用して、今年度は広島と福岡の学生が、町の「自然の音」を聴き合い、感性に基づく地域語りに取り組んだ。3つ目はボランティアガイドの方々の語りに着目した「地元観光」モデルである。参加学生たちは地元の広島城を訪れ、観光ガイドの方の話を起点として、中世から現代までの重厚な歴史に触れ、自分たちの住む地域を見つめ直すストーリーを生み出した。

いずれのプログラムも制作過程と発表において、継承のコミュニケーション活動を埋め込んだ。制作を通じて、他者の経験は自己の経験に転換され、発表することで自己の経験は他者の経験となっていく。共感のリンクにより語りのリレーが生まれ、有機的に広がり、深まっていく他者と地域理解のコミュニケーションモデルが考案できた。

年末には研究フォーラム「語る・変わる・結びつく 記憶し継承する主体と共同体を育むメディアリテラシー」を開催した。研究メンバーによる報告の他、ハワイの日系コミュニティを例にエスニック・アイデンティティを涵養するメディアやジャーナリストの役割についてご講演いただき、本研究のプログラムが人びとの日常やメディア環境にどう位置づけることができるのか議論した。

残された課題としてあげられることは、本研究では、継承の主体を育んでいく能動的な語り継ぎのためのメディア表現実践プログラムと、継承活動の基礎となる他者理解のコミュニケーションモデルを構築したが、それがどのように社会に埋め込まれ、持続的に社会的実践として活用されていくかまではモデル化できなかった。一方で、フォーラムでも議論されたが、エスニックメディアの担い手となっていく「変容エージェント」がコミュニティにおける役割取得の中で育まれることや、アイデンティティを高めるフェスティバルなど空間としてのメディアの可能性、コミュニティを形成する場としての地域メディアの役割など、調査や研究会を通じて、本研究が接続しうる社会実践についての考察は深めている。今後も継続して取り組んでいきたい。また、本研究で生み出した実践プログラムのメディアリテラシー教育としての意義について理論的に検討することも、これから取り組んでいくべき課題である。他者の応答としての自己表現というメディア様式の可能性の検討と共に研究を進めていきたい。

実践についてはローカル放送局のニュース番組や複数の新聞で報じられた。制作した作品はウェブへの掲載やコミュニティ FM の番組で報告するなど公表を進めており、一つの作品はニッポン放送の番組企画で優秀作

品に選ばれた。研究報告書の公開や作品のアーカイブ化のためのウェブサイト立ち上げた。研究の成果については、国際学会や図書、論文を通じて発表しており、期間終了後も継続して取り組んでいく。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

小川明子、地上波民間放送局における番組審議会の現状と課題 審議委員の構成と運営実態に着目して、マス・コミュニケーション研究、査読有、92、2018、pp. 67-85、[https://doi.org/10.24460/mscom.92.0\\_67](https://doi.org/10.24460/mscom.92.0_67)

小川明子、音声メディアの明日 Nagoya ラジオカフェから見たもの、民放、査読無、556、2018、pp. 42-45

林田真心子、なつかしい「音の風景」実践生活史を物語る音と記憶をめぐるメディア・リテラシー、福岡女学院大学紀要人文学部編、査読無、第27号、2017、pp. 163-182、<http://hdl.handle.net/11470/295>

小川明子、研究実践報告：負の記憶を記録することの可能性と困難 二つのデジタル・ストーリーテリングワークショップをめぐる覚書、メディアと社会、査読無、第9号、2017、pp. 71-86、<http://hdl.handle.net/2237/25954>

[学会発表](計7件)

Tsuchiya, Yuko. From Small Findings to Unique Perspectives: A Digital Storytelling Workshop toward Critical/Creative Media Production. Media Education Summit 2018, November 2018. Baptist University. Hong Kong.

Tsuchiya, Yuko. Co-Creating a Life Digital Story of an Atomic Bomb Microcephaly Patient in Hiroshima. Panel: From Hiroshima to Fukushima: Redesigning Communication Processes for Nuclear Crisis. International Association for Media and Communication Research 2018. June 21st, 2018. University of Oregon. Eugene, USA.

Tsuchiya, Yuko. Learning is Creating: A Research of University Students' Findings through Disaster Radio Production. International Association for Media and Communication Research 2018. June 21st, 2018. University of Oregon. Eugene, USA.

Hayashida, Mamiko. Nostalgic Sounds: Media Practice for Enriching Soundscape. Panel Session: The Reflective Front: Digital Media and Creative Methods, Media Education Summit 2016. November 4th, 2016. John Cabot University. Rome, Italy.

Tsuchiya, Yuko. Students' Learning with an Intersubjective Narrative Media Form for Disaster Risk Reduction and Understanding Others. The Toronto School: Then, Now, Next. October 16th, 2016. University of Toronto. Toronto, Canada.

坂田邦子・土屋祐子、災害を語り伝えるメディア表現：<他者>表象から<自己>語りへ、社会情報学会(SSI)学会大会、2016年9月11日、札幌学院大学、北海道江別市

Tsuchiya, Yuko. Narrative Relay via Media Production: Telling a Story as a Response to Others. Roundtable: When Does Youth Become Creative? Exploring Key Elements of Media Workshop Programs to Enhance Creativity, Media Education Summit 2015. November 20th, 2015. Emerson Collage. Boston, USA.

[図書](計5件)

Ogawa, Akiko and Tsuchiya, Yuko. Palgrave MacMillan. From the Pre-Story Space: A Proposal of a Story Weaving Method for Digital Storytelling. In Digital Storytelling: Form and Content. Dunford, Mark and Jenkins, Tricia Eds. 2018. 244 (pp.139-154)

小川明子、晃洋書房、放送と地域コミュニティをつなぐ仕組みを作る 番組審議会のリ・デザイン、松浦さと子編、日本のコミュニティ放送 理想と現実の間で、2017、277 (pp.134-146)

Sakata, Kuniko. 共著. IUDCIUM Verlag GmbH. Media-Contents und Katastrophen. 2016. 203 (pp. 153-182)

坂田邦子・三村泰一編、サンパウロ、被災地から考える3・11とテレビ、2016、268

小川明子、リベルタ出版、デジタル・ストーリーテリング 声なき想いに物語を、2016、206

[その他]

(1)ウェブサイト

地域を語り継ぐ自己メディア表現とコミュニケーション  
<http://narrative.relay.media-literacy.net/>

Open Sound Community  
<http://os-community.seesaa.net/>  
メディア・コンテ広島 原爆小頭症の方と  
<http://mediaconte.net/hiroshima/>  
Toward Inclusive Media 社会的弱者に寄  
り添うもう一つのジャーナリズム  
[http://inclusive-media.net/note-05/1.ht  
ml](http://inclusive-media.net/note-05/1.html)

は本研究の成果報告のウェブサイト。  
は広島経済大学の学生が運営するコミュニ  
ティ FM におけるゼミ番組のブログサイト。  
広島経済大生の制作した作品は全て番組で  
報告した。 は本研究の原爆小頭症の方との  
実践報告。 は に関連するエッセイ。

## (2) マスメディア報道

ANN50 周年記念「MY HOMETOWN スマホーム  
ピーコンテスト」第 1 期 秋 入賞者決定！、  
オールナイトニッポン、ニッポン放送、2018  
年 2 月 2 日（本研究による制作作品「流れた  
時を思う」が番組企画の優秀作品に選出）  
[http://www.allnighnippon.com/news/2018  
0203-15359/](http://www.allnighnippon.com/news/20180203-15359/)

患者に学び体験残す 学生と原爆小頭症  
の動画制作、毎日新聞、2017 年 6 月 17 日朝  
刊 25 面

原爆小頭症女性の心情を映像作品に、RCC  
ニュース 6、中国放送、2017 年 5 月 25 日

原爆小頭症、患者の思い 広島経済大生ら  
動画制作、読売新聞、2017 年 5 月 22 日朝刊  
29 面

学生が伝える原爆小頭症 被害実態を短編  
動画に 広経大で体験聞くワークショップ  
始まる、中国新聞、2017 年 5 月 21 日朝刊 23  
面

聞き書きサークルが動画作成 大島北高、  
南海日日新聞、2017 年 12 月 9 日朝刊 8 面

1~2 分映像で地域表現 北高の聞き書き  
サークル DST ワークショップ、奄美新聞、2017  
年 12 月 4 日朝刊 9 面

夕方フレンド、あまみエフエム、2016 年  
12 月 16 日（番組ゲストとして大島北高校・  
聞き書きサークルの生徒が活動報告）

ユムグチ 800、アマミテレビ、2016 年 10  
月 7 日放送（情報番組内でデジタルストーリ  
ーテリング・ワークショップの様態を放送）

文化、言葉の継承の再認識 古老や名人か  
ら聞き取り 大島北高、南海日日新聞、2016  
年 8 月 6 日 9 面

地域の人と交流、シマ学ぶ 北高聞き書き  
サークル、奄美新聞、2016 年 8 月 8 日 8 面

被災地復興、県外大学生が女川取材 地元  
に帰りメディアで取材、石巻かほくニュース、  
河北新報 ONLINE、2016 年 2 月 18 日

[http://ishinomaki.kahoku.co.jp/news/201  
6/02/20160218t13003.htm](http://ishinomaki.kahoku.co.jp/news/2016/02/20160218t13003.htm)

被災地への思い動画に 自ら果たす役割や  
決意 広島経済大生が 9 短編作品、中国新聞、  
2015 年 7 月 30 日朝刊 27 面

人々の思い短編動画に 社会動かす新たな

手法、中国新聞、2015 年 7 月 26 日朝刊 9 面

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

土屋 祐子 (Tsuchiya, Yuko)  
広島経済大学・経済学部・准教授  
研究者番号：80458942

### (2) 研究分担者

小川 明子 (Ogawa, Akiko)  
名古屋大学・情報学研究科・准教授  
研究者番号：00351156

坂田 邦子 (Sakata, Kuniko)  
東北大学・情報科学研究科・講師  
研究者番号：90376608

林田 真心子 (Hayashida, Mamiko)  
福岡女学院大学・人文学部・准教授  
研究者番号：80624212